

発達支持的生徒指導に焦点を当てた実践に関する一考察（2）

内田 信也

九州女子大学 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1（〒807-8586）

（2024年6月17日受付、2024年7月29日受理）

要 旨

「生徒指導提要」¹⁾では、従来の事後対応的な「治す」リアクティブ型生徒指導から日頃の授業・体験活動や課題の未然防止を重視した「育てる」プロアクティブ型生徒指導へ力点を置くことの大切さが強調されている。言い換えれば、特定の児童生徒に特化した「事後」指導・援助から全校体制で取り組む全ての児童生徒の「成長・発達を支える生徒指導」への転換である。それを踏まえ、拙稿「発達支持的生徒指導に焦点を当てた実践に関する一考察（1）」²⁾で、発達支持的生徒指導の充実、児童生徒が安心して学べる環境づくり、小中連携による生徒指導について筆者の校長としての実践経験を基に具体的な実践内容や方法について取り上げた。本稿では、それらと共に大切な柱である授業づくりについて生徒指導の面から考察した³⁾。その結果、「授業スタンダード」の確立、「単元マップ」による「分かる授業」の展開、「〇〇ノート」を用いた学校と家庭との連携の3点が極めて有効であることが明らかになった。また、学習指導と生徒指導の一体化を支える組織マネジメントと検証改善サイクルによるチーム学校としての取組が不可欠であることが具体的な実践を通して明らかになった。

1. はじめに

内田（2023）の「発達支持的生徒指導に焦点を当てた実践に関する一考察（1）」²⁾では、生徒指導の側面から「魅力ある学校づくり」を中心テーマに考察した。これは、「生徒指導提要」で強調されている発達支持的生徒指導や課題予防的生徒指導（課題未然防止教育）の在り方を改善していくこと、及び常態的・先行的（プロアクティブ）な生徒指導が、諸課題の未然防止や再発防止につながることを明らかにしたものである。すなわち、「魅力ある学校づくり」は、児童生徒にとって学校が安全・安心な場所となるための学校全体での取組なのである。そして、もう一つの大切な柱となるのは、「分かる授業」の工夫である。学校現場でよく耳にする発言がある。「学習指導と生徒指導は車の両輪であり、どちらかがうまく回らなくなると車はバランスを失い、進まなくなる。」あるいは、「生徒指導が土台としてしっかりしていなければ、学習指導は成立しない。」等である。ある意味で正論であり、ある意味で正論とは言えない。広義として生徒指導を捉えるか、狭義として捉えるかでその意味合いは違ってくるのである。いずれにしても、生徒指導と学習指導を別々のものとして二項対立ではなく、融合した一体として捉えることがスターティングポイントになるであろう。例えば、その捉えを具体化したものが、生徒指導の機能を生かした授業づくりであると考えられる。授業規律が守られ、学習意欲を喚起する生徒指導の機能を生かした授業づくりが、学校を挙げて全教科で実施されるならば、授業の質が高まり、学力向上にもつながるはずである。「考察（1）」において、学習環境の整備と、学校生活の大半を占めその中心である日頃の授業の見直し・充実がこれまで以上に今後大切なことを強調した。そのためには、全教科で共通して行う事柄を各学校の実態に応じて洗い出し、日々の授業で一致して実践していくことが肝要である。これまで行ってきた取組を全教職員で振り返る事から始め、不十分な点を補充し、従来行って効果を発揮したことは継続する等、を再確認し実践しなければならない。そこで、それらを発達支持的生徒指導として意識的に行うことを提案したい。また、児童生徒が安心して学べる環境づくりとして、可視的環境づくり（清掃活動の充実、「花いっぱい運動」の展開、活きた掲示物の提示、靴を揃える習慣づくり等）と、不可視的環境づくり（言葉遣い、挨拶運動・声かけ、時間厳守等）を挙げ、それぞれの内容と方法及びその効果について論じた。また、小中連携における生徒指導についても言及し、改めて小中連携の重要性についても論じた。本稿では、「考察（1）」で触れることができなかった学力向上につながる「分かる授業」とそれを推進していくための発達支持的生徒指導の取組となった組織マネジメントについて考察していく。

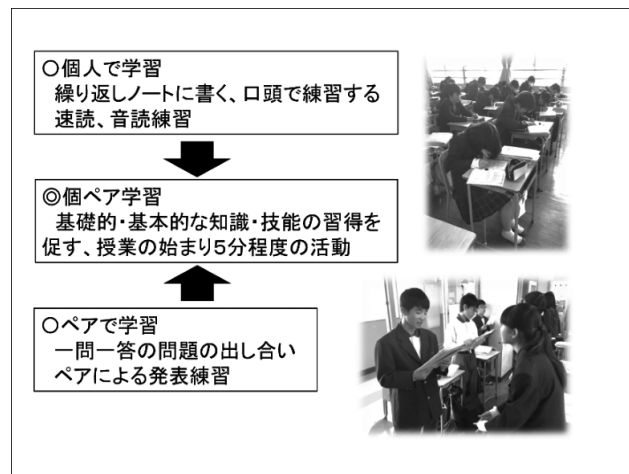
2 学習指導と生徒指導の一体化

児童生徒の学力保障及び学力向上は、「分かる授業」によって確かなものとなる。そのためには、全教職員で「分かる授業」の在り方について共通理解をし、チーム学校で教育活動を行っていく必要がある。それぞれの学校における教育課題を明らかにし、その解決のために児童生徒の実態に即した取組が行われなければならない。「分かる授業」を成立させるためには、授業規律をはじめ生徒指導面での働きかけが鍵となる。特に、児童生徒の自己指導能力の育成を目指した全教職員で「支える」という基本姿勢が求められることになる。そこで、学習指導と生徒指導の一体化を図る具体的な取組について以下述べていきたい。

2-1 組織的な授業改善及び学力向上の取組

(1) 「授業スタンダード」の確立

それぞれの教師に任せっぱなしの授業が日々なされているならば、学校総体として児童生徒の成長を促すこと、学校としての取組を客観的に検証すること、あるいは教育活動の成果と課題を明らかにすることはできない。児童生徒の側から見ても授業ごとに行い方が変わり、見通しを持つことができないならば、安心して授業に臨むこともできない。そこで、全教科共通の最低限の授業の行い方を決めておくことが不可欠になってくる。すなわち、その学校における「授業スタンダード」の確立が必要となってくるのである。例えば、導入の工夫である。授業の冒頭で前時までの学習内容を想起させたり、本時の授業内容に関する伏線



【図1】A校の「個ペア学習」

的な活動を入れたりして、学習の雰囲気づくりを必ず短時間でも設定することも「授業スタンダード」の一つであろう。【図1】は、筆者が校長として福岡県教育委員会から3年間委嘱を受けた「学力向上推進拠点校事業」を行ったA校の例である。「個ペア学習」と名づけた基礎的・基本的な知識・技能の習得を促すための授業の始まり5分程度の活動を全教科で実施している。まず、個人で既習事項をノートに書いたり、口頭で練習したり、速読や音読練習をする。次に、ペアで一問一答の問題の出し合いやペアによる発表練習等をする。各教科の特性や学習の進捗状況で学習内容や活動は様々であるが、全教科で授業の冒頭にこの「個ペア学習」を行うことで、本時の学習への雰囲気づくりが形成されたのである。こういった全校で統一性のある「授業スタンダード」の他に、一単位時間の授業で必ず「めあて」・「まとめ」・「振り返り」の時間を確保したり、授業の進め方について確認する時間を設定したり、児童生徒に考えさせる場やお互いの考えを交流する場を確保したりすることを「授業スタンダード」として入れておくこともあるであろう。いずれにしても、授業の行い方に関する約束事をその学校の「授業スタンダード」として掲げることでより一層の統一性が保証されてくる。

また、別の側面から「授業スタンダード」を考えることもできる。例えば、教師側の「授業スタンダード」として生徒指導の機能を意識的に働かせ、児童生徒の自己存在感を味わえるようにする工夫、共感的な人間関係を育成するためのペアワークやグループワークの工夫、自己決定の場を提供するための工夫等を毎時間何らかの形で行っていくことも考えられる。このように全教科で「授業スタンダード」を基にした授業が展開されることで、児童生徒は見通しを持って意欲的に安心して授業に臨むことができるのである。さらに、それぞれの取組に関する検証もより正確になり、改善すべき点等も明確になるのである。なお、「授業スタンダード」については、教室に掲示したり、プリントにして児童生徒や保護者に配布したり、あるいは学校のホームページで紹介したりする等、公開しておくことが肝心である。

【図2】は、A校の「授業スタンダード」であるが、学びのルールや授業のルールは、最低限どの学校においても入れておきたい項目である。A校のこの「授業スタンダード」も当然ながら一朝一夕で出来上がったものではない。例えば、「授業スタンダード」の項目4は、「考えを広げ、深める学習」を実現するために

〇〇年度版 〇〇中学校スタンダード

1. 個ペア学習
 【学習の基礎的・基本的な知識・技能の繰り返し学習】※既習内容のアウトプットや繰り返し【個人で学習】…繰り返し書く、繰り返し口頭で練習、暗唱、音読、速読、豆テスト等【ペアで学習】…一問一答のクイズの出し合い、ペアで発表の練習、ペアで教え合い、音読等

2. 「めあて」の確認 【授業の見直し確認】
 前時からの流れや単元指導の目標から「今日は何をするのか」、「何をを使うのか」等を提示する。または、対話から設定することもある。

3. 学習内容

型	講義説明型	訓練鍛錬型	問題解決型
内容	【何がわかる・できるようになるのか】	【何をどうやって練習/習得するのか】	【どのような課題を、どのように解決するのか】
めあて	「…できるようになろう。」	「全員で…ができるようになろう。」	「(手段)を使って、(目的)を(活動)しよう。」
例	「分母に根号がある数の分母を整数にできるようになろう。」	「現在完了形の三用法の練習問題が全員できるようになろう。」	「戦後、日本がどのように独立したのか、グラフと図を使って説明しよう。」

4. 考えを広げ、深める学習
 授業の課題に対し、生徒が考えたことを交流させ、考えを広げ、深めさせる。

比較	個人⇒考えの交流⇒他者との共通点と相違点を見つける⇒個人 教師「グループで考えを出し合って、共通点と相違点を見つけてごらん！」 ※ノートやワークシートに共通点と相違点をメモ(箇条書きでOK)し、特色として、どちらが正しいか議論したり、どちらかを選択しその理由や原因を見つけさせたり、いろいろな方法がある。
選択	個人⇒考えの交流⇒一つを選択⇒個人 教師「グループの中で一番いいものを選んでください！」 ※各グループで話し合い、なぜ、どうして選んだのか、その理由をしっかりと書かせる。
関連	個人⇒考えの交流⇒考えの関連をみつけて一つにつなげる⇒個人 教師「グループで出た二つ以上の意見を一つの文につなげてごらん!」、「出し合った二つ以上の意見を一つにまとめてごらん!」 ※異なる考えの中に関連する要素を見つけ、意見を一つにまとめる。 「〇〇〇だから、▲▲▲となる。」、「□□□が原因で、***となる。」
分類	個人⇒考えの交流⇒似たもの同士に分類⇒グループに名前をつける、キーワードを見つける⇒個人 教師「出し合った意見を似たもの同士に分けてごらん。次にグループを囲ってグループに名前を付けたり、キーワードを見つけたらしてごらん。」 ※その後グループで発表させ、課題に応じて最も良いグループを選んだり、重要な要因を見つけたり、いろいろなまとめが考えられる。
学び合い	教師「グループの全員が〇〇〇できるまで、お互いに説明してください。」 ※全体では意見が言いづらい生徒も小グループでは発言しやすい。説明する方はアウトプットとなり、既習事項の定着を促し、理解できなかった生徒も質問しやすくなる。

5. 「まとめ・ふり返り」
 まとめは、生徒が一時間の授業を振り返り、何を学習したのかを実感させるために、「めあて」に対する「自分の考え」を生徒自身の言葉で表現させる活動です。
 ふり返りは、生徒が一時間の授業をふり返って、自分自身の姿容について自覚させる活動です。

発見	わかったこと、わからなかったこと
頑張り	授業の中で自分が頑張ったこと、友だちが頑張っていたこと
挑戦	次に自分がやってみたいこと
確かめ	授業のまとめとなる問題を解き、理解できたか確認

【図2】A校の「授業スタンダード」

全教員で教科の垣根を越えて度重なる議論と実践を通して出来上がったものである。交流の視点を「比較」・「選択」・「関連」・「分類」・「学び合い」の5つに決め、学習内容に応じて最適の視点を選択して交流させるのである。視点を決めて全教科で実施することで交流の質が上がり、ねらいであった「考えを広げ、深める学習」ができるようになったのである。

（2）「単元マップ」を取り入れた授業

① 「単元マップ」とは

一時間一時間の授業を「授業スタンダード」を軸に各教科の特性や教師自身の個性を活かしながら充実させていくことは、言うまでもなく学校教育における生命線である。授業において一人一人の児童生徒の実態に応じて声をかけたり、励ましたりして支援することは、発達支持的生徒指導に焦点を当てた授業の基本である。ただし、それぞれの授業が単元指導計画のどの位置にあり、何に向かってどのように展開していくのかを児童生徒と教師間でしっかりと共有していなければ「木を見て森を見ず」のたとえではないが、授業効果が薄れてしまう。そこで、森に当たる単元指導計画をより視覚的にデザインし、A4一枚にまとめ、児童生徒が道に迷わないような「学びの地図」のような形にしたものを「単元マップ」と呼ぶことにする。当然、指導計画であるので教師の手持ち資料になるわけだが、単元の最初の時間に児童生徒にこれから数時間かける単元で何を学び、どう授業が展開していくのか等を説明し、見通しを持たせる時の重要な資料となるのである。もし、児童生徒が計画通りに学習が進まなかったり、理解が十分でなかったりした場合でも「単元マップ」であれば、つまずきの箇所を発見しやすくなる。また、児童生徒の学習状況から学習計画を修正しなければならない場合でも単元全体を俯瞰しながらその調整がしやすくなるメリットがあるのである。すなわち、「単元マップ」とは、単元を通して児童生徒に身に付けさせたい力を明確にし、ゴールまでの道筋を明らかにした単元指導計画のことなのである。

そして、「単元マップ」をより実働化させるために、「単元マップ」上に3つの授業スタイルを組み合わせることを提案したい。研究授業後の協議会で「先生の説明する時間が多過ぎて、児童生徒の活動が十分ではなかった。」や、その反対に「児童生徒の活動がほとんどで結局『活動あって学びなし』の状態であった。」等の意見が出ることもある。また、指導助言の場で「講義型の一方通行の授業から脱却し、児童生徒と双方向な活動がある授業を行っていくようにしましょう。」や「ドリル学習のように機械的な繰り返しばかりが多く、もっと児童生徒に考える場を設けましょう。」というようなコメントに対し、教師間で「講義型の授業ではいけないのか？」や「基礎基本事項をしっかりと定着させるための訓練はいつ行うのか？」等の議論がよくなされる。どの発言ももっともであり誤りではないが、そのやり方と考え方については説得を要するようと思われる。それぞれの先生方は熱意と誇りを持って授業を行っているはずである。従って、それぞれの授業のやり方を真っ向から否定するようなトップダウンの説得の仕方は本末転倒である。要は、「単元マップ」に従って3つの授業スタイルを【図3】が示すようにバランスよく組み合わせることを基本にし、細かいところはそれぞれの教師の創意工夫に任せるようにしなければならない。肝心なことは、本時の授業は単元指導計画上どの位置にあつて、本時でしっかりと身に付けさせておきたいのは何なのかを念頭に置いて授業を行い、次時につなげていくことである。

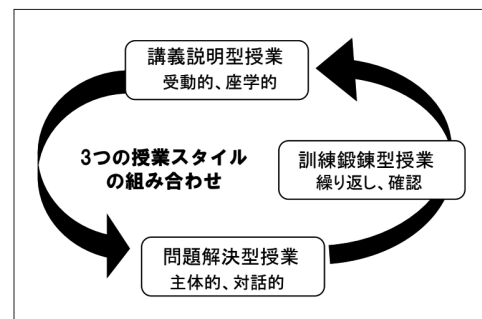
さて、3つの授業スタイルとは、(ア) 問題解決型、(イ) 講義説明型、(ウ) 訓練鍛錬型のことである。

(ア) 問題解決型・・・児童生徒が学習した知識や技能を活用したり、試したりすることが主となる授業型

(イ) 講義説明型・・・教師の説明を通して問題解決に必要な知識や技能の習得を主とする授業型

(ウ) 訓練鍛錬型・・・繰り返し学習等を通して講義演習で習得したことを活用することが主となる授業型

授業者は、それぞれの授業スタイルの特性を十分に理解した上で、本時の授業がどの型を中心にして展開するのかをしっかりと把握して臨まなければならない。



【図3】3つの授業スタイルの組み合わせ

② 「単元マップ」の作成手順

「単元マップ」の作成については、【図4】のような手順で進めていく。

<1>単元のゴール像を設定する

まず、その単元で目指す目標をゴールとして設定することである。抽象的なゴールではなく、より具体的な児童生徒の姿として設定する必要がある。そのために、児童生徒の到達度を測定するための検証問題と授

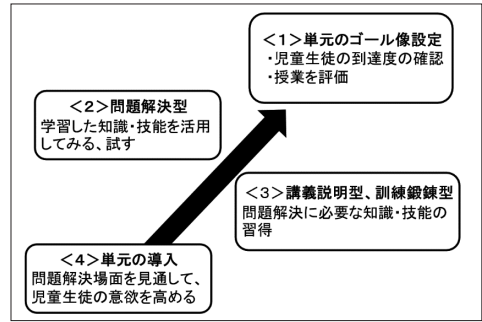
業評価表をあらかじめ作成しておかなければならない。指導者は、それらを常に念頭に置いて授業を進めていくので、授業にぶれが生じない。また、児童生徒の学習状況や反応等を見ながら臨機応変に余裕を持った対応ができるようになるのである。

<2>問題解決型の授業を位置付ける

単元のゴールを設定したならば、次に検証問題の解決に必要な知識や技能を活用して問題解決する授業を「単元マップ」に設定する。既習事項を基に児童生徒がじっくりと考えることができる学習を仕組むのである。単元全体を見て、教科の特性や指導内容等を勘案して節目となる段階に位置付けることになる。従って、単元末に限らず、単元の途中でも必要に応じて位置づけることができるのが「単元マップ」の一つの特徴でもある。その問題解決型の授業での様子を見て、その後の学習の進め方等を調整することができるメリットがある。

<3>講義説明型、訓練鍛錬型の授業を位置付ける

講義説明型と訓練鍛錬型ばかりを行っていたのでは児童生徒の学習意欲を維持することが困難である。また、考える力も育成することは難しく、学習に対して受動的になってしまう。しかし、その逆に問題解決型の授業ばかりでは当然のことながら基礎基本な知識や技能が身に付かず手探り状態で学びが成立しない。そこで、講義説明型の授業では必要な基礎基本事項をできる限り分かりやすく説明したり、訓練鍛錬型の授業では講義説明型の授業で学習したことをしっかりと定着させたりする活動が必要になってくる。位置付けた問題解決型の授業の前に、何時間の講義説明型の授業や訓練鍛錬型の授業が必要なのか、そしてそれらをどのように絡めていくのかをデザインしていくことが教師に求められる。この段階にこそ教師としてのオリジナリティーを発揮できる醍醐味があると言える。ただし、あくまでも3つの授業スタイルはその授業の主たる活動を示すものであるから、一単位時間の間中、説明ばかり、あるいは繰り返し学習ばかりをするという意味ではないことに注意しなければならない。大切なのは、児童生徒側の視点から偏りのないバランスの取れた授業設計をすることである。



【表4】「単元マップ」の作成手順

単元目標

第2学年2組 英語科学習指導案
単元名 Lesson3 The Ogasawara Island 指導者

単元目標
・コミュニケーション活動や表現活動において自分の予定や考えについて、英語を使って積極的にやりとりしようとする。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
・日本語メモや構成メモをもとに、条件を満たした宣言文を作成できる。【外国語表現の能力：書く】
・教科書本文の内容について筋路にまとも、その理由を説明できる。【外国語理解の能力】
・本家を電子表現や接続詞 chat を正しく用いて、地球のためにできることを書くことができる。【世界や文化についての知識・理解】

単元マップ 計10時間 平立て(○) 評価標準(◇)

第一回 未来を教す表現と接続詞 that の使い方を理解し、自己表現をすることができる。

<p>①【講義説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本単元の内容をつまみ、Lesson3の重要な単語・熟語について覚めるようになる。 ○ 本単元の見出しを持たせるために、題材のねらいについて説明し、Lesson3の新旧単語を単語シートで提示し、ペアで確認させる。 	<p>②【訓練説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 助動詞 will を学び、行儀市の天気をもとに2文以上で説明しようとする。 ○ 助動詞 will の使い方に慣れさせるために、友達に詳しい情報を元にした表現活動を行わせる。
<p>③【講義説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 未来を表す be going to を学び、過去の予定について2文以上で説明しようとする。 ○ 未来を表す be going to の使い方に慣れさせるために、インタビュー活動を行わせる。 	<p>④【訓練説明】 本時</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 接続詞 that を学び、好きな著名人についての考えを2文以上で説明しようとする。 ○ 接続詞 that の使い方に慣れさせるために、友達に好きな著名人についての考えを説明させる。

第二回 教科書を読み、必要な情報を読み取り、それを元に関心のあることを説明したりすることができる。

<p>⑤【訓練説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本文のボスターの内容について日本語で3つ以上の情報を記入することができる。 ○ 本文の内容を視覚的に理解させるために、聞き取りと読み取りの両方を行わせる。 	<p>⑥【訓練説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本文から読み取れるボールの性格を理由とともに説明することができる。 ○ 根拠を持って説明させるために、本文の中から理由を見つけさせる。
<p>⑦【訓練説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自分が興味のある情報について2文で説明することができる。 ○ 自分の書いたことを発表させるために、本文の表現を参考にさせる。辞書を使わせたりする。 	<p>⑧【訓練説明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 小笠原群島の人々の願いを読み取り、理由とともにパンフレットに適切なタイトルをつけることができる。 ○ 小笠原の人々の願いを読み取らせるために、観光客の行動や島への思いをグループで共有させる。

第三回 未来を教す表現や接続詞 that を使って地球のためにできることを宣言することができる。

<p>⑨【問題解決】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 英語の構成メモに3つ以上の記述ができる。 ○ 内容を構成して宣言文を作成する。また、構成メモを作成するために、グループで日本語メモを作成させる。 	<p>⑩【問題解決】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 条件を2つ以上満たした宣言文の原稿を作成することができる。 ○ 条件を満たした原稿にさせるために、前時の構成メモを元に原稿を書かせ、相互評価をさせる。
--	---

評価問題
あなたは英語の授業で「地球のためにできること」について発表することになりました。その原稿を以下の条件に当てはめて書きなさい。
【条件】1. 地球のために自分ができることを書く 2. 具体的な例を挙げる 3. 25語以上で書く

講義説明型

問題解決型
どんな基礎的・基本的な知識・技能を使って、何ができるようになるのか

訓練鍛錬型

検証問題

【図5】「単元マップ」の例

<4>単元の導入の工夫を決定する

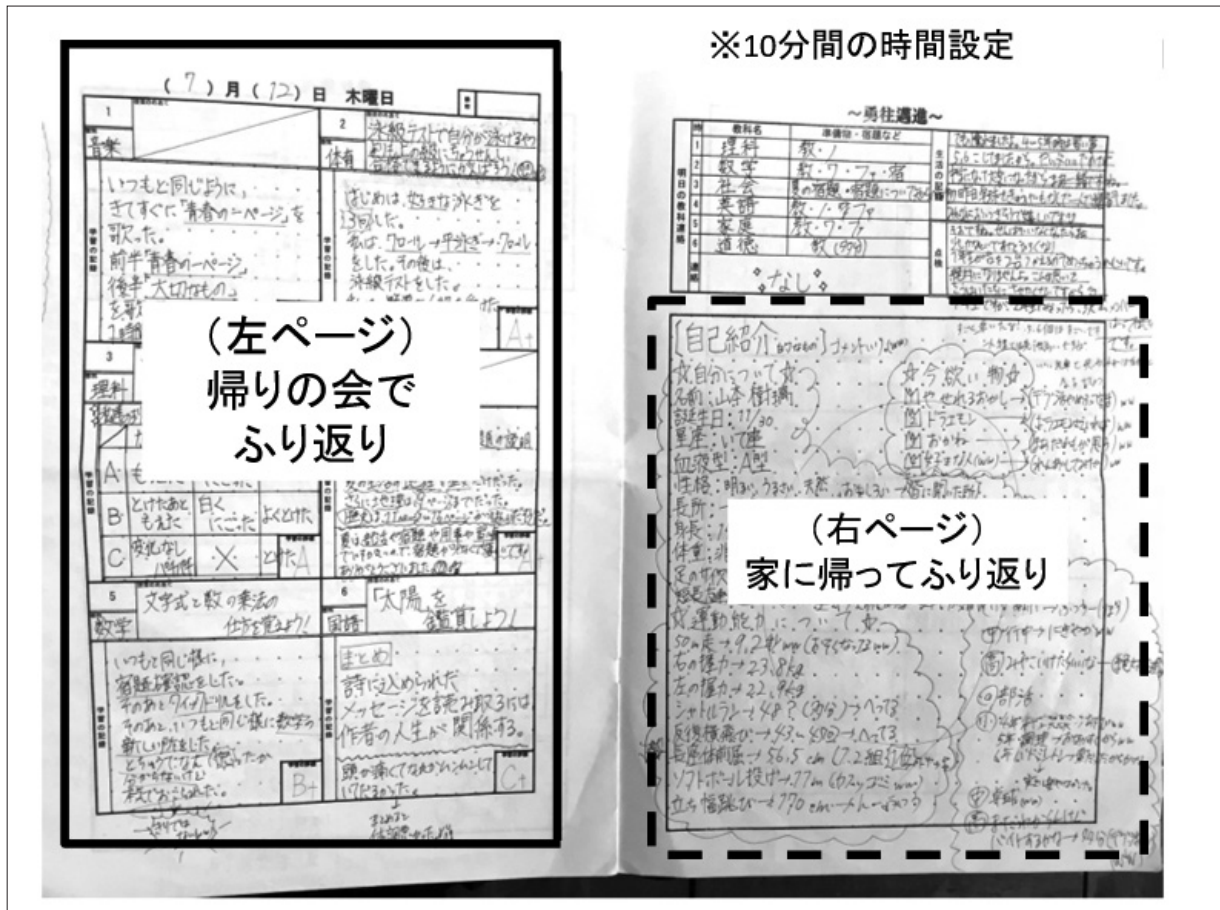
「単元マップ」作成の最後の段階で単元の導入の工夫を決定することは、通常の指導計画を作成する手順と大きく異なる点であろう。これは「単元マップ」ではゴールからスタートに遡って作成していくという大きな特徴を示している。単元の導入では、問題解決の場面を見据えて、児童生徒の学習意欲を高めることに特化した工夫が必要になる。児童生徒のスキーマを活性化させるために、疑問を生じさせたり、探究意欲を喚起させたりする工夫を講じなければならない。ここでも担当教師の個性発揮の場があり、決して画一的な指導を学校として求めるものでないことを共通理解しておきたい。

【図5】は、以上のような手順で作成した英語科の「単元マップ」の例である。先に述べたように単元指導計画をより視覚的にデザインし、A4一枚にまとめたものとなっている点をイメージしたものである。

(3) 学校と家庭との連携を強化する「〇〇ノート」について

市販あるいは学校独自で作成した自主学习ノートや生活ノート等を児童生徒に持たせ、学校と家庭をつなぐ手立ての一つとして活用している学校が多い。保護者との連携に使う連絡ノート等もあるが、この「〇〇ノート(※〇〇には学校名を入れたりすると独自性や親近感が出てくる。)」は、児童生徒を対象にした学校と家庭との連携強化を目指したノートのことである。学校で学んだことをしっかりと定着させることを目的にしたものである。エビングハウスの忘却曲線を引き合いに出すまでもなく学習したことの大半は一度の学習だけで定着できるものではない。

そこで、下校する前に「〇〇ノート」を使って一日の授業を振り返らせるのである。帰りの会で時間を取り、まず自分で、それからペアやグループで確認し合わせると良いであろう。忘れかけた授業内容等についてコミュニケーションを通じて補足し合ったり、助け合ったりすることは、発達支持的生徒指導の観点からも極めて大切なことである。ただし、ノートを書き終えるまで無制限に時間を取らないようにしなければなら



【図6】「〇〇ノート」の例

らない。時間をあらかじめ決め、その時間内にできたところまでにすることがポイントである。時間を決めないと中学校では部活動や生徒会活動等にも支障をきたすであろう。もし、その日のノートの分を完成させるまで放課後も続けると、児童生徒の負担になり、しだいに苦痛となって長続きしない。また、ノートを書き終えることが目的であるかのような誤ったメッセージとして児童生徒に伝わりかねない。そうすると帰りの会の時間もこのノートを使った活動も形骸化し、意味のないものとなりかねない。そのため、この「〇〇ノート」を使わせる時には、時間を決め、できなかった箇所は家庭でさせるようにするのである。【図6】は、「〇〇ノート」の例であるが、平日の一日分である。見開き2ページの分量である。授業内容が思い出せなかった箇所等については、教師側からすれば、児童生徒理解度等をみる貴重なデータと言えるもので、それらを材料にして声掛けや教育相談に活用できるのである。あくまでも完成させることが第一の目的ではなく、児童生徒に他の児童生徒と交流し、一日の授業内容を振り返らせることがこのノートを使った活動の目的であることを忘れないようにしたい。翌朝提出させ、一人一人のノートを見て、教師は必ず一言でもコメントを書いて、帰りの会に返却する。そして、もし記入できていない箇所があってもそれを不十分とするのではなく、その児童生徒の現状を示すものと捉え、支援の材料としなければならない。

2-2 「分かる授業」を支える仕組みづくり

(1) 組織マネジメント

前項では発達支持的生徒指導の観点から組織的な授業づくりが、「分かる授業」に通じることを述べた。この項ではそれを実現し、持続可能な仕組みにするための組織マネジメントについて述べていく。

組織マネジメントで全教職員が同じ目標に向かいベクトルを揃えるためには、まず課題を洗い出す必要がある。A校においては、次のような課題が洗い出された。

- ・「分かる授業」を推進するための指針となるものがないので、ベクトルが揃っていない。

- ・「分かる授業」のための共通した方策がないので、取り組む内容がそれぞれの教師によって異なる。

- ・研究組織はあるが、各部会の目的や役割等が不明確なので、機能していない。

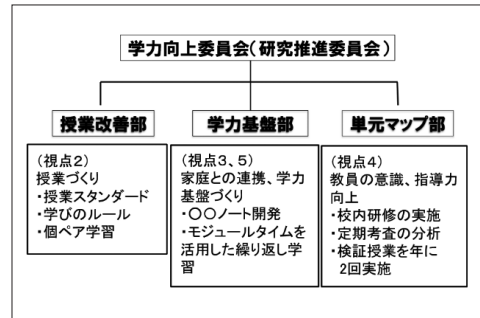
これらの課題解決のために研究組織の各部会をまとめるための学力向上委員会（研究推進委員会）を設置した。【図7】のように授業改善部、学力基盤部、そして単元マップ部の3つを束ねる形にし、全教師がいずれかの部会に所属し、学力向上の取組を実施していくようにしたのである。【図8】の学力向上プランを活かし、A校でもそれに沿った取組を具体的にを行うようにしたのである。3つの部会それぞれの取り組む内容については以下のとおりである。なお、【図7】で（視点）とあるのは、学力向上プランの（視点）に対応している。

- 授業改善部・・・（視点2）の授業づくりを担当し、全教科に渡って共通して行える取組について実践研究を進める。主として「授業スタンダード」、「学びのルール」、「個ペア学習」について原案を提案したり、それらの進捗状況等について報告したりする。

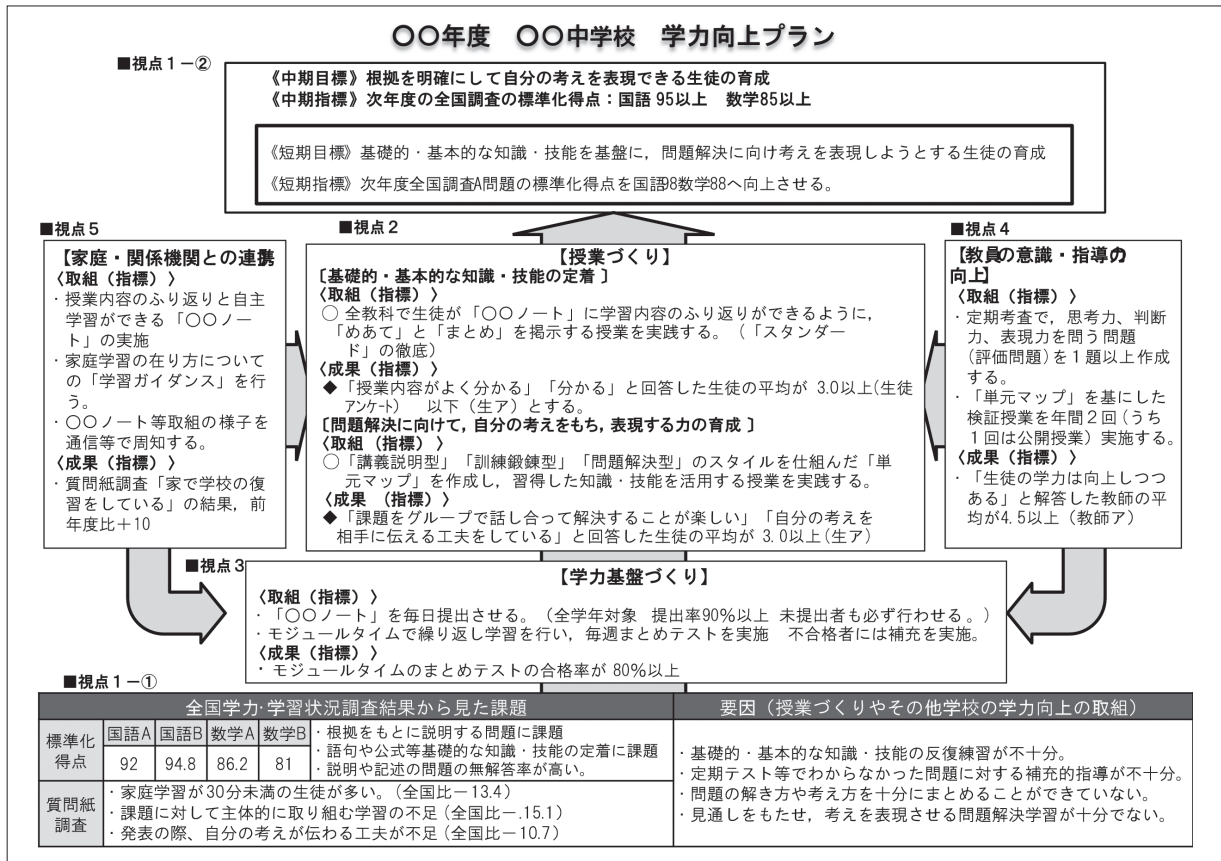
- 学びの基盤部・・・（視点3）と（視点5）の家庭との連携及び学力基盤づくりの強化を目指し、学校と家庭との連携を図る「〇〇ノート」の開発と学力基盤づくりのための繰り返し学習について担当する。

- 単元マップ部・・・（視点4）の教員の意識及び指導力向上を目指し、校内研修の企画、検証授業の実施、各種アンケート等の分析を担当する。

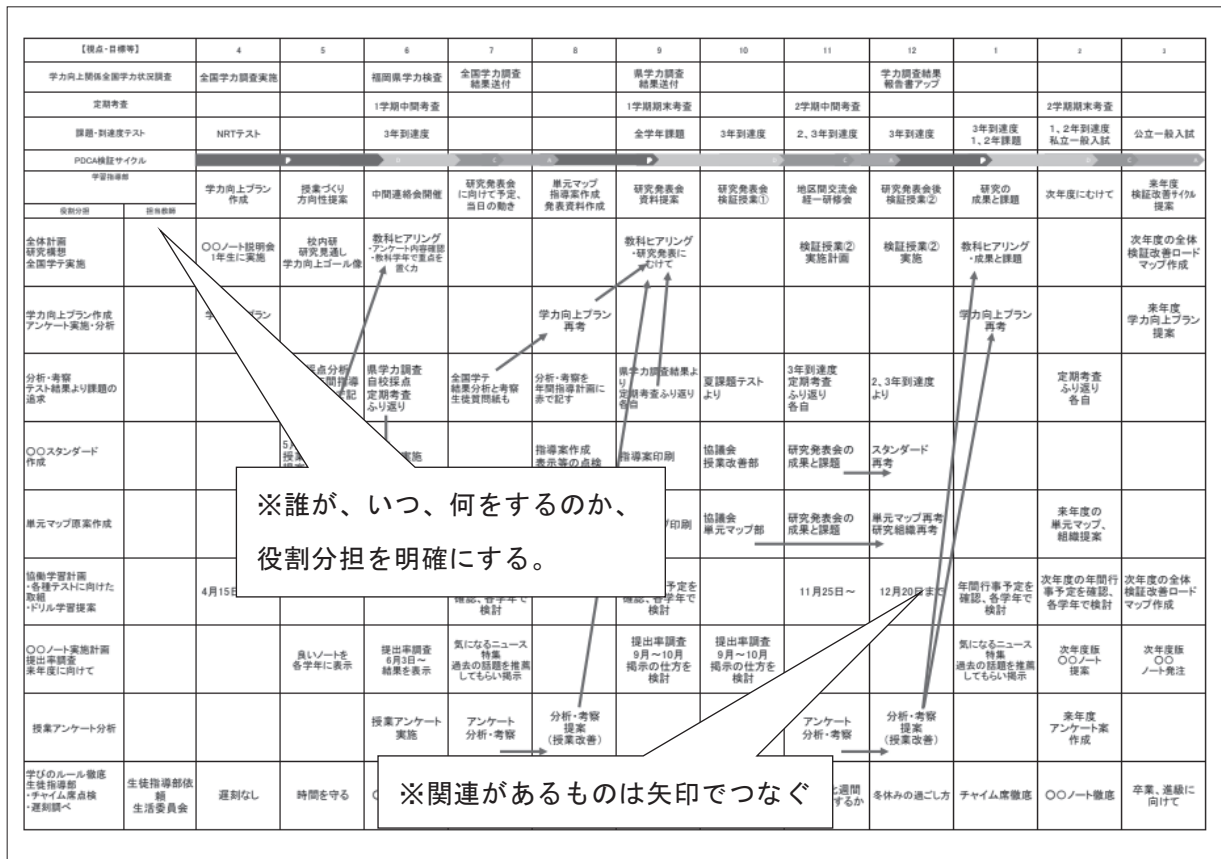
全教員が一人一役でいずれかの部に所属し、【図9】に示すように、所属する部会の目的や役割が明確となったことで取組が大きく前進したのである。そのため、全教員で現状の課題を明確にし、その解決のために「授業スタンダード」と「単元マップ」をフル活用して継続的に授業改善を行った。また、組織的な取組によって全教員で役割を分担することで一人一人の教員の負担が軽減され、結果的に児童生徒と触れ合う時間が確保されるようになった。



【図7】 研究組織

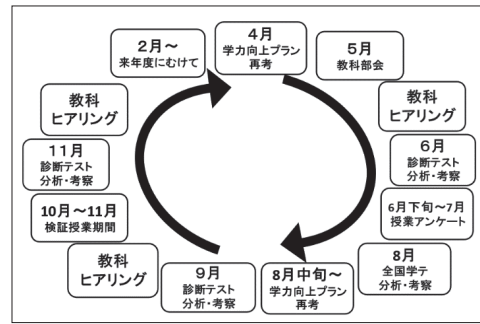


【図8】学力向上プラン



【図9】検証改善サイクルロードマップ

【図10】は、年間のPDCAサイクルである。その中で教科ヒアリングとあるのは、学力向上委員会が教科毎に担当教員と取組の進捗状況や児童生徒の様子を面談して把握する場のことである。【図9】のように、このPDCAを年3回実施し、診断テストの分析と考察、授業アンケートを基にした振り返り、そして次の段階に向けた具体的な方策の確認等を主に話し合った。このようにして教科ヒアリングは、教科毎の各教員の取組を把握し、悩み等についても協議する場となっている。また、授業改善の質の向上や教員のモチベーションアップにもつながっている。



【図10】年間のPDCAサイクル

(2) 検証改善サイクル

組織マネジメントと併せて検証改善サイクルを全教員で共有しておくことが不可欠である。取組の見直し・改善は、【図9】の検証改善サイクルロードマップを基準に行うようにした。特徴的な点は、関連する項目を矢印で示し、教員が共同で作業を行いやすいようにしたことである。さらに、【図11】の授業アンケートを児童生徒に定期的実施することで児童生徒が自分で授業を振り返らせる機会となった。また、教員が一丸となって統一性のある授業を行っていることを再認識させる機会にもなった。このように学校がまとまっている姿を見せることは、発達支持的生徒指導を充実させていく上でも極めて重要なことである。そして、全教員が同一歩調で全ての授業を通して児童生徒が自発的・自主的に考える機会を十分に確保することによって、お互いに自由に意見を述べ合ったり、それを認め合ったりできるような安心して学べる雰囲気が醸成されるようになったのである。

一方、教師同士による授業参観についても、【図12】の授業参観シートによる授業改善検証期間を設け、参観シートを用いた教員相互による授業参観を実施した。「授業スタンダード」の視点に沿った授業評価ができるように3色の付箋を使い「自分の授業に取り入れたこと」、「授業者の課題」、「授業者への質問」を記入するようにした。授業後は参観シートをもとに授業者と参観者による意見交流を行った。着眼点を共有することで「分かる授業」に対する実効性の高い意見交換がなされるようになった。また、その意見交換の場でまとまった改善点等を直ぐに「研究だより」で全教職員員に周知することで授業改善も素早く行うことができる。

3 おわりに

「魅力ある学校」・「児童生徒が安心して学べる学校」

授業アンケート 英語科 【生使用】				授業アンケート 技術科 【生使用】					
アンケート項目	評価 4 3 2 1 とても良い ← あまり良くない			アンケート項目	評価 4 3 2 1 とても良い ← あまり良くない				
1 授業の「めあて」はどのような学習目標の中から選べるものでしたか。	4	3	2	1	1 授業の「めあて」はどのような学習目標の中から選べるものでしたか。	4	3	2	1
2 基本的・発展的な知識・技能を習得するために、適切な教材・資料・資料を準備して授業を行いましたか。					2 授業の準備に「めあて」や「できたこと」に関する教材・資料・資料を準備して授業を行いましたか。				
アンケート項目				アンケート項目					
3 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方					3 「めあて」と学習の見直しについて				
4 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方					4 知識・技能の習得について				
5 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方					5 話し合いを通じた考えの広がり・深まりについて				
6 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方					6 自分の考えを理由や根拠をもとに「書く」活動について				
7 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方					7 学習したことを活用することについて				
8 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方					8 振り返りと「書く」活動について				
9 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方									
10 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方									
11 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方									
12 授業の進め方、やり、進め方、進め方、進め方									

【図11】授業アンケート

授業参観の視点			評価	コメント	
導入から最後まで授業の流れがよく構成されている。	A	B	C	D	
生徒の思考の流れに沿ったわかりやすい板書をしている。	A	B	C	D	
考えを深めるための多様な学習形態・活動を取り入れている。	A	B	C	D	
本時のねらいが達成できた。	A	B	C	D	

○高かったこと 生徒の反応 青=良かったこと・自分の授業に取り入れたこと 赤=課題が見えたこと 黄=授業者への質問

※3色の付箋を使って分類

参観者氏名 _____

【図12】授業参観シート

を標榜しながら、発達支持的生徒指導に焦点を当てた実践に対して考察をしてきた。考察（1）と（2）を通して、一つは、可視的環境づくり（「清掃活動の充実」、「『花いっぱい運動』の展開」、「活きた掲示物の提示」、「靴を揃える習慣」等）と不可視的環境づくり（「言葉遣い」、「挨拶・声かけ」、「時間厳守」等）によるアプローチが有効であることを実証した⁴⁾。もう一つは、学習指導と生徒指導が一体化した「分かる授業」によるアプローチである。具体的には、「授業スタンダード」の確立、「単元マップ」による授業づくり、学校と家庭の連携を強化する「〇〇ノート」の開発・実施である。また、「分かる授業」を支える体制づくりとして組織マネジメントと検証改善サイクルの在り方についても言及した。これらが機能することによって教師の負担が減少する一方で児童生徒と接する時間が増加し、学校の実態に即した形でそれぞれの取組の充実を図ることができた。いじめや不登校等の生徒指導上の課題が深刻化する中で、発達支持的生徒指導に焦点を当てた実践を基にそれぞれの学校の実情に応じた取組の参考になることを期待したい。

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省（2022）『生徒指導提要』教育図書
- 2) 内田信也(2023)「発達支持的生徒指導に焦点を当てた実践に関する一考察（1）」『九州女子大学学術情報センター研究紀要 Vol.7』pp.179-188
- 3) 行橋市立行橋中学校(2019)「根拠を明確にして自分の考えを表現できる生徒の育成～『単元マップ』を取り入れた授業づくりを通して～」『令和元年度行橋市立行橋中学校研究紀要』
- 4) 築上町立築城中学校(2016)「思考力・判断力・表現力を高める学習指導方法の在り方～学びのユニバーサルデザインに基づいた授業づくりを通して～」『平成28年度築上町立築城中学校研究紀要』

A study on practice focusing on developmentally supportive student guidance (2)

Shinya UCHIDA

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

The “Student Guidance Guidelines” emphasizes a shift from the conventional reactive type of student guidance that “cures” to a “nurturing” proactive type of student guidance that emphasizes daily classes, experiential activities, and prevention of problems. In other words, this is a shift from “after-the-fact” guidance and support focused on specific students to “student guidance that supports the growth and development of all students,” a school-wide approach. Based on this, in my paper “A Study on Practice Focusing on Developmentally Supportive Student guidance (1)”, I will discuss the enhancement of developmentally supportive student instruction. Based on the author’s practical experience as a school principal, this article discusses specific practical content and methods for creating an environment where children can learn with peace of mind and for student guidance through cooperation between elementary and junior high schools. In this paper, we have considered lesson planning, which is an important pillar, from the perspective of student guidance. As a result, it became clear that three points were extremely effective: establishing “Lesson Standards,” developing “Understandable Lessons” using “Unit Maps,” and collaborating between schools and families using “XX Notes.” In addition, it became clear through concrete practice that it is essential to work as a team school through organizational management and verification& improvement cycles that support the integration of academic guidance and student guidance.

Key words : Lesson Standards, Unit Maps, XX Notes, School-wide approach